

---

# モテメガネ

ししとう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モテメガネ

### 【Nコード】

N2782U

### 【作者名】

ししとう

### 【あらすじ】

いつも発明品をコナンに馬鹿にされていた阿笠がふと仕返しもかねた悪戯を思いつく。

その悪戯のせいでコナンはある意味で酷い目に……。

(前書き)

この作品に出てくるキャラのほとんどが壊れています。そのような作品が嫌な方は見ないほうがいいです。マジで。

「何だよ博士。いきなり呼び出したりなんかして」

「おおつ、よく来たのう新一」

阿笠の一本の電話で呼び出されたコナン。珍しい電話に少しコナンは訝しいとは思いつつも急いで博士の家までやって来た。阿笠は滅多に着ない白衣を身につけており、所々煤のような黒い汚れが目立っていて、いかにも今の今まで研究してましたというような格好だ。

「何だよ博士、目にクマなんか作って。もう若くねーんだから寝れる時には寝とかねーと体に悪いぜ？」

コナンが親切心から呟いたと思っただ言葉に阿笠は両眉をびくびくと痙攣させてポケットに手をつ込む。何事かとコナンは首を傾げるが、コナンからすれば何事かと思うくらいしか出来ないためにそれだけで終わる。

阿笠は白衣のポケットの中をゴソゴソと漁りながら、

「キミはいつもわしの開発した発明品を馬鹿にしとったのう」

阿笠は眩しいものを見るかのように少し目を細める。

「ああ？ どうしたんだ博士。まさか……また何か変なモンでも発明したのか？」

そういつてけらけらと笑うコナン。どうせまたくだらない子供だましの発明品に違いないと思っただことに意識せず毒づく。

その瞬間、ぶちんと。阿笠の中にある何か切れる音が阿笠の中にだけに響く。

妙な違和感を感じ取ったコナンだったがすぐに阿笠がいつもの優しい笑顔を浮かべてきたので特に気にしなかった。

「そうじゃ……新一。ちょっとこれを嗅いでみてくれんかのう？」

そういつて阿笠はテーブルの上に置いてあるビーカー（中に薬品が入っているがその色が言葉では言い表せない色をしている）をコ

ナンの鼻先に有無を言わずに押し付ける。

「な、なんだよっ！　いきなり！！　そんな変な色の薬なんて近づけるなよ！」

「安心せい。ただの麻酔薬じゃから。数十秒意識が吹っ飛ぶだけじゃから」

「なお更近づけんじゃねえ　ッ！」

コナンが阿笠の言葉に体を後ろに下げたが、それよりも先に、  
「うっ、」

薬品の強烈な臭いがコナンの鼻先を通り過ぎ、一気にコナンの中にまで進入してきた。人間の嗅覚というものは意外にも強力なようだ。

ばたり。

白目になったコナンの意識が飛ぶ。

「ふっふっふ……新一。キミに素晴らしい発明品の実験台になってもらうぞい」

にやりと口元をマッドサイエンティストのように狂気なまでに歪めると、ポケットの中から華奢な『メガネ』を取り出した。レンズの色はわずかに桜色に染まっていて、『メガネ』と言うよりはオシヤレに目覚めた中学生が背伸びをして掛けるような『サングラス』のようにも見える。

それをコナンがいつもかけているメガネを外して、かける。

すると満足するように阿笠は微笑む。

「ふっふっふ……、聞こえてはおらんだろうが一応説明をしておこうかのう。新一。お主がかけたメガネは『モテメガネ』と言ってその名前の通り、かけるだけで誰でもモテモテになってしまうという人類全てが喉から手が出るほど欲しい夢の道具なのじゃ。その効力は米花町全体に広まり、米花町のどこにしようとして『モテメガネ』のラブルすいかいに惑わされて、普段はなーんとも思っておらんマセガキだろうが憎いあんちくしょうだろうと愛しくて恋しくてたまらなくなってしまう、それがわしの新発明の『モテメガネ』なんじゃ。ちなみ

にその『モテメガネ』はあまりの付け心地の良さに、メガネをかけた人間はその存在を忘れてしまうという開発者の愛が溢れるモノになっただけだ。

「邪悪な笑みを浮かべていた阿笠だったが、

「そろそろ薬が切れる頃じゃな」

「パン！ と手を打つ。」

と、同時に床に倒れたコナンの意識が戻った。

「うーん、あれ？ 俺……どうしたんだっけ？ 何か記憶が曖昧なんだが」

どうやら阿笠に薬を嗅がされたことを忘れてるようで辺りをキョロキョロと見回す。

「何を言ってるか新一。すっかりせい」

「あ、ああ。そう……だな？」

コナンの視線がピタリと止まる。視線を追うと、そこには地下室からつい先ほど出てきた哀の姿が見えた。

「ん？ そんなところで俯いたりして何やってんだ灰原？ 何か顔も赤いけど」

「べ、別に関係ないでしょ！ 顔も赤くなんかなってないし！」

俯いたままの哀の言葉にコナンは、

「まあ……そりゃそうだな。お前が熱出してぶっ倒れても博士がいりゃ俺には関係ないか」

「な、何で……」

「んあ？」

「何で……そんなこと言うのよ。どうして……そんな酷いこと、言う、のよ」

哀の体がわずかだが上下に揺れた。

「ばか！ いじわる！ ふ、ふええええんんんん！！」

哀の瞳から大粒の涙が零れ落ちた。

「な、何でいきなり泣いてんだお前！ んなキャラじゃねーだろうが！」

「私だつて女の子なの！ 泣きたい時ぐらいあるわよ！ いつつも誰かさんに酷いこと言われてりゃそりゃ泣くわよ！ ふえええええん！！！」

「おいおい」

「あー泣かせた、泣かせた。ゆーきこくーんに言つてやるー」  
「俺かあ！？」

小学生にまで退行した阿笠の言葉にコナンは内心、イラツとする。  
「と、とりあえず泣き止んでくれよ。あ、謝るからさ。な、な」  
よく分からないが自分のせいで哀が泣いていると思つたコナンはとりあえず謝つておくことにする。そういえば哀は意外と涙脆いことを思い出す。何気ない一言で哀のことを傷つけていたのかもしれないと本気で反省し始める。哀の傍まで駆け寄つたコナンが優しく声をかけると、

「うるさい！ このばかつ！ 本当は反省なんかしてないんでしょ！  
ばか！ 貴方なんか大、大、き、大きら、 大好きいい！！」

何故か告白された。

「はあ！？ いきなり何気色悪いこと言つてんだお前！ 何で泣きながらキレてんの！ 何でキレながら告つてんの！？」

訳が分からない事態に思わず後ずさりするコナン。  
と。

「コナン君！！」

「がきんちよ！！」

「コナンくん！！」

阿笠の家の玄関の扉が思いっきり開けられたかと思うと三人の少女が姿を現す。三人の少女は声の順番で、毛利蘭、鈴木園子、吉田歩美だ。二人は高校生だが、一人はコナンと同じクラスの同級生である。

「ほほう。これはまた……中々面白いことになってきおつたのう」  
あくまで他人事の阿笠はコナンたちの輪から少し距離を置く。

「やっぱりここにいたんだね」

「まったく、散々探させてのがきんちよが」

「もう、ここにいるならいるって探偵団バツジで教えてくれてもいいのに」

三人の登場に哀の表情がキツと変わる。後ろ手からビーカーを取り出すとコナンの唇に押し付ける。

「江戸川くん。反省してるならこれを飲んで。飲んでくれたら許してあげるから。一気にこの『惚れ薬』を飲んで！ ほら、早く！」  
「ふん！」

蘭が正面に拳を風を切るように突き出すと、パリン！ という音と共にコナンの口元にあったビーカーが軽快な音を立てて割れる。

「じぶっ！」

「っし！」

蘭はそれを見届けると拳を軽く握り、ガッツポーズ。

「な、何をするんですか蘭さん！ せっかく私が作った惚れ薬が割れちゃったじゃないですか！」

「それはこっちの台詞よ哀ちゃん。いきなりコナンくんになんか変な薬を飲ませようとするなんて。もっと正々堂々と出来ないのかな？」

「愚問ですね。正々堂々と勝負して負けたら元も子もないんです。だったら時には強引に責めてみるのも一つの手段です。それが愛つてものです」

「あ、愛つて……」

あまりにも真正面の言葉に蘭は思わず顔を赤くする。

それを見た哀は何か勝ち誇った様子で、

「ふふん。はつきり言わないと分かりませんか？ 私、江戸川くんの方が好きなんです。愛しているんですよ。彼以外愛せないんです！」

「な、なんですってーッツ！？」

「????? ねえ、今……外から小学生の男の子の断末魔みたいなも

のが聞こえなかった？」

そう尋ねた園子の言葉に哀は、

「気のせいじゃないんですか？」

と、軽く流した。

「で、でも……いくら愛しているからって薬はやっぱり卑怯なんじゃないかな？」

「ま、私も蘭の意見に賛成かな。その方法はいくらなんでもフェアじゃないわ。ほら、がきんちよ。お詫びって言ったらなんだけど、このカタログの中から好きなものなんでも選んでいいわよ。何でも買ってあげるから」

「でえいやあッ！」

蘭の二段蹴りがカタログごとコナンの頭に直撃。

「ぐぼげぼっ！」

ギャグ漫画のワンシーンのようにコナンの体は上空へと飛ぶ。

「ちよっとちよっとーっ！ 何してんのよ蘭。カタログが蘭の蹴りでポロポロになっちゃったじゃないの！」

蘭は蹴りの後に小さく息を吐き、呼吸を整える。

「まったく。園子も油断も隙もないわね。……………まさか園子がそんな手段を取るなんて思わなかったわ」

「……………ふーん」

哀が視線だけをコナンのお腹の上に乗っているカタログに写し、

「『世界名作ミステリー“初版”カタログ』……………ねえ。そりゃあ卑怯ね。江戸川くんなら飛びつくのは見るよりも明らかだもの」

カタログに載っている本の値段は全て数百万以上が当たり前で、中には数千万、億の値が付いているモノもあるようだ。

確かに三度の飯よりもミステリー小説が大好きな少年であれば喉から手が出るほど欲しくなるだろう。

が。

コナンはそれを確認するよりも前に蘭の蹴りによって吹き飛ばされたために、お腹の上で何が転がっているのかも分かっていない。

「……ちいつ、ばれてたのか。いけると思ったんだけどなあ」

「まさか園子がそんな卑怯な手を使うなんてね……」

「いいじゃないどんな手段を使っても。その茶髪の女の子だって薬なんていう手段を使っただから。私とその子と比べたら可愛いもんよ」

「可愛くないし、そもそもコナンくんは私のものよ。私がずーっと育ててきたんだから、誰にも渡さないわ！」

ふんぞり返る園子。

軽く拳を握りながら言い返す蘭。

それを無言のまま見つめる哀。

「うっわ……それは引くわよ蘭。いくら好きでもがきんちよのことをもの扱いとか引くわ」

「別に園子が引くのは自由よ。その代わりにコナンくんが私のものってことを認めるってことになるんだからね。そーなったあかつきには〇〇も黙らせるほどの××をして、既成事実を作るだけなんだからね」

「ど、どっちが卑怯者かーっ!？」

女の鬨いを目の前にしてあまりの現実にコナンはゆらりと後ずさりをする。

と、

「……おっと」

いつの間にか後ろに回りこんでいたコナンと同級生の吉田歩美と体がぶつかった。

「……えへへ」

体がぶつかったにも関わらず、歩美はどこか嬉しそうに笑みを浮かべ、何の躊躇いもなくコナンの腕を取り、するりと自分の腕を組んできた。

あまりにも自然すぎる行動にコナンどころか周りにいた人間でさえ、一体歩美がなにをしたのかを理解するのに数秒、時間がかかった。しかし分からなかった訳ではない。理解するのに時間がかかっ

ただけなので、やはり戦いは起きた。

「ちよろつとー、こそこそと歩美ちゃんは何をしているのかなー？」

さっさとがきんちよから腕を放しなさい」

「そうそう。コナンくん嫌がってるじゃない」

大人気ないコーコーサー二人がコナンから歩美を（これまた大人おと気なく）引き剥がそうと腕を伸ばすと、

「うるさいよ、おばちゃんたち」

不意に鈴のような少女の声が響き渡った。少女の声に三人の少女が背中に氷を突っ込まれたような顔をした。一人はぴくりと眉を蹙ませ、一人は唇の端を引きつかせ、一人は手の甲にビギバギとマスキメロンのような青筋を浮かべる。

きいーやーあつ、とコナンが黄色い悲鳴を喉から出そうになるのを必死に抑えていると、びぎり、と明らかに空耳レベルを超えた幻聴が聞こえ出したかと思えば三人の少女たちは、

「……誰がおばちゃんだ、誰が！！」「……」

息の合った双子タレントもびっくりするほど声を揃えて怒鳴る。おそらく今の状態より声が揃うということはもう今日を逃せば永遠にないだろう。

歩美は三人の怒声にまったく怯むことなく、むしろ強大な敵に立ち向かう勇者のごとく、

「コナンくんは小学生なんだよ？ それだったら私か哀ちゃんて決まりでしょ？」

これが常識なんです、と歩美はうんうんと頷く。それを聞いて、あ、と。哀は自分の見た目を思い出してぼむと手のひらを叩く。

「そうそう。それぐらいの常識は持ち合わせてもらわないと困りますよ、……お姉さん方」

敵側にいたはずの哀がいつのまにか歩美の味方になっていた。女は利に聡いと聞かすがこれほどまでとは、とコナンは歩美に腕を組ま

れながら結構真剣に考えていた（現実逃避のため）。

「くうく、このマセガキ共め！。後数年経てばこっちの気持ちも分かるってものなのにく……、だあっ！ 言い返せない自分が悔しい！！」

自分の服を噛み、悔しそうにドツタンバツタンと地団太を踏む園子。

「それでね……哀ちゃん」

「何？ 吉田さん」

年長組（高校二年生の一七歳）を言い負かした歩美は二人の年長さんのことも構わずに哀へと視線を向ける。

「哀ちゃんもコナンくんのこと好き……なんだよね？」

哀は言葉に迷うことなく頷き、

「ええ、好きよ」

「そっか……」

歩美は可愛らしく顎に細く伸びたたおやかな指を置くと少しだけ考えて、

「じゃあ……妻妾さいせつ同衾どうきんでもする？」

「ぶっ！？」

小学一年生の口から出るべきではない、というより出るはずがない言葉が歩美の可愛らしい口から出てきたことにコナンは思い切り吹いた。吹き出したのはコナンだけではなく、その場にいた全員が同時に吹き出す。そんなことに構うことなく歩美は至極可愛らしく、「私は哀ちゃんのことも好きなんだけど……やっぱりコナンくんのことも好きなの。どれぐらい好きかって聞かれれば比べられないほど好きって答えるぐらい好きなの。ケンカももちろんしたくないし、かといって泥棒猫って切り捨てることもできない。だったらこれしかないと思うの」

(いや……思うの……って。この子本当に小学生か　！？)  
コナンは超真剣かつ超真面目にそんなことを言う歩美の顔を見る。  
その後、超真剣かつ超真面目に悩んでいる哀の顔を見る。

「……………」  
灰原哀は超々真剣に考えていた。コナンを独り占めにするか、妻妾同衾という手段で妥協するかを。

(おいおい、マジで考えてんぞこの女……)  
このまま小学一年生三人で妻妾同衾などという、泥に塗れに塗れたドロツドロの昼ドラコース確定か　！！　などと半分以上本気で頭を抱えていると、

ボタンッ！　と阿笠邸の玄関の扉が力の限り開けられる。

今度は誰だ！　とコナンが半ばヤケクソ気味に開いた扉に顔を向ける。

すると、

「待て待て待てええええいつつっ！！」

(な、何でアイツがいるんだーッ！！)

声に出さず、心の中で絶叫するのも無理はない。

「ほう……まさか、のう」

阿笠は顎に手を置きながら自分でも気づかない内に驚いていた。どうやら阿笠でさえも、この状況は想定外だったようである。

「工藤は誰にも渡さへんどー！！」

いい加減に目を逸らすのはやめよう。

そこにいたのは『西の高校生探偵』と呼ばれる交友関係もそれなりに深い服部平次という“男”だった。

そう、“男”なのだ。再び少女が増えるなどであれば、それなりのリアクションも見せることが出来たのだが、何故か追加メンバーに選ばれたのは“男”だった。

しかも、気味の悪いことに服部もまた、雰囲気がいつもと違うように見える。

「(まさか……モテメガネの効力が同姓にまで効くとはのう。これ

は計算外じゃった。」

実は阿笠がそんなことを小声で言っていたりするが、そんなこと誰も気が付かない。

阿笠が想像していたよりも遙かに場は混沌と化している。

小学生の少年一人を女子高中生二人と小学生の少女二人、更には男子高校生一人が取り合うという修羅場にコナンの頭は既に理解を通り越して全ての世界が壊れて見え始めていた。

だからだろうか。

「工藤もお前らなんかとおるより俺と推理勝負してたほうがいいに決まっとるやろが！」

なー、工藤と言いかけた服部の顔に。

無防備にコナンの方を見た服部の顔に。

キュルキュル、と、激しい作動音をさせながら虹色に輝くキック力増強シューズで。

サッカーボールをぶつけた。

てんでん、と。サッカーボールが弾む。

阿笠はその光景を最後に地下室へと“逃げ込んだ”。

わーきゃーという悲鳴を無視して。

(後書き)

お久しぶりの方はお久しぶり。初めての方はこんにちは。

最近、小説の更新をほとんどしていませんでしたが、覚えていますでしょうか？ ししとうです。

初めてといえば初めてかもしれない完全な一から一〇〇までギャグシナリオのこのお話は一体どうだったでしょうか？

最近はスランプとでも言いますが、シリアスな話を書いていて「これ、つまんねーな」と一度でも思うと書く気が失せてしまうという気力状態だったんですね。

シリアスがつまらないならギャグシナリオを書けばいいじゃない、と思って書いたのがこの『モテメガネ』なるギャグシナリオだった訳です。

ほとんどリハビリに近い作品なので正直面白いのかどうか分かりません。しかし、今後も行き詰った時などにこの様なギャグシナリオを書くことがあるかもしれせん。

そしてそのシナリオのほとんどがこのようなキャラ崩壊を招く、とんでもない作品になるかもしれせんが、お付き合いいただけると幸いです。

ギャグというわけで地の文を極力減らしてみたのですがどうでしょうか？

感想・評価お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2782u/>

---

モテメガネ

2011年6月22日18時55分発行